

やっちゃんのちくぶん

ぼくは、さんすうが、すきだけど

こくごは、とくいじゃ、ない。

プールは、とくいだ。

うみは、とくいじゃ、ない。

チャボは、さわられるけど、

はじめて、あつた、犬は、さわれない。

たかちゃんは、さんすうが、とくいじゃ、ないけど、

このごろ、さんすうが、とくいに、なつて、きました。

たかちゃんは、おんがくの、ピアノは、とくいだけど

モッキンとかは、あんまり、できない。

たかちゃんと、ぼくは、ぜんぜん、ちがつけど

ぼくは、たかちゃんのこと、大すきです。



やっちゃんのおくぶん（小学校低学年向け）

A 教材設定の意図

たくさんの情報が氾濫し、「できる」ことが良しとされがちな社会の中で、自分の価値を見失い、自分を好きになることができない人がふえている。学校も、「できる」「できない」というものさしで測られることの多い社会で、その中で自分に対する確かな実感をもてない子どもたちは、荒れやいじめ、不登校など、さまざまな現象でもがき苦しむ姿を表面化させてきている。

苦手なこと、できないことがあっても、それからみんなと同じでなくても「そのままの自分」、そして「ほかのだれともちがう自分」の存在こそが、かけがえのない大切なものであるという実感を持つことで、人は自分を好きになり、大切にすることができると。そうした自己肯定感を持つことによって、はじめて他人の存在をも認めることができるようになり、人の心の痛みを感じたり、気持ちを受けとめたりできるようになる。

そのためにはまず、ありのままの自分を見つめる作業をしなければならぬ。この教材を通して、率直に自分の姿を言葉に表すことができればと思う。自分のできない部分を認めることはむずかしい作業だが、教師やまわりの子どもたちが、そうした部分も含めて受けとめることができれば、きつと子どもたちは自分の弱いところを出し合うだろう。さらに、自分ばかりで

なく友だちや先生の姿も表現することが可能であれば、ぜひ取り組んでお互いの存在を認め合う関係をつくりたい。

B 教材の解説

この作文を書いたやっちゃんは、小学校一年生である。複式学級でいっしょに生活をしている二年生のたかちゃんに対して、「算数ができない」とバカにするような態度を見せるようになってきたので、お互いのことを考え合う授業の中からこの作文は生まれた。

作文の前半では、やっちゃんは自分のことを書いている。得意なことに対して、苦手なことを対比させて書くことで、自分にとつてのマイナス面も素直に出している。後半ではたかちゃんのことを、同じようなスタイルで表現している。自分のことを書くのとは違って、何を書けばいいのか迷ったかもしれない。一年生の児童が、クラスの他の子どものごんごんふうに書くのはむずかしいだろう。この学級は、やっちゃんとたかちゃん二人だけの学級だから、こうしてお互いのことを書けたという状況はあるものの、こうして友だちのことを書いたとき、お互いが違う人間だとはつきり認識できたことを押さえた。ことばとして書き表すということは、頭の中に漠然と持っていた

意識をはつきりとさせる作業である。そしてことばとして表現されたものが、自分の意識として認知されていくのである。やっちゃんも、書きながらたかちゃんのこととできないことをしつかりと見つめ、その上で「ぜんぜんちがうけど、大スキです」と書いている。算数ができないことだけで、たかちゃんをバカにしていたやっちゃんが、人にはそれぞれ得意なこと、苦手なことがあることに気づいていったのである。

C 指導上の留意点

①本教材では、「書く」と「たかちゃん」のことについて書かれてはいるが、この教材にもとづいて子どもたちに書かせる場合には、子どもたちの実態に応じて、自分のことだけに絞ってもいい。

②自分の苦手なことについて書くことをためらう子どももいるだろう。励ましと、書いたものをすべて受けとめる姿勢で臨んでほしい。一人ひとりに発表させる場合には、得意なことと苦手なことも含め、「そんなみんなが大好きだよ」というように、教師が受けとめていることをことばで表現することも忘れないでほしい。

③単に得意なこと苦手なことというだけでなく、自他の内面についても表現できる中学生にも、本教材は応用できる。その場合は、教材の提示のしかたを前半、後半、最後の一文などに分けるなど工夫をして、生徒の興味を引きつけてほしい。（F 授業の展開例②参照）

D 参考資料

- ・一九九七年度人權週間の取り組み報告
圓藤裕美子（富来町立稗造小学校）
- ・挿し絵 西尾庸之（辰口町立和氣小学校）

教師の基本発問・助言	児童の活動・指導の留意点
<p>一 導入</p> <p>① みなさんの得意なことは何ですか。</p> <p>② では、苦手なことはありますか。</p> <p>二 展開</p> <p>③ 今から「やっちゃん」という子の書いた作文を見せます。先生が読むので聞きましょう。</p> <p>④ やっちゃんは何が得意で、何が苦手だと書いてありますか。</p> <p>⑤ たかちゃんは何が得意で、何が苦手だと書いてありますか。</p> <p>⑥ みなさんも、自分や友だちの得意なことや苦手なことを書いてみましょう。書いたら読み合います。</p> <p>⑦ 友だちの発表を聞いて、どんな気持ちになりましたか。</p> <p>三 まとめ</p> <p>⑧ ○○さんのようにうれしくなった人はいますか。また△△さんのようにいやな気持ちになった人はいますか。</p>	<p>② 児童の素直な思いを出させるため、教師の苦手なことをはなすのもよい。</p> <p>⑥ クラスの人数が多いときは、班ごとに友だちのことを書かせ、読み合わせるとよい。一年生は友だちのことを書くのはむずかしいので、自分のことだけでもよい。</p> <p>⑦ 全体で読み合えないときは、班の中で発表し合い、班を循環して子どもたちの感想を聞き取る。</p> <p>⑧ いやな気持ちがあった児童については、そのままにしておかずに話し合う。</p>

教師の基本発問・助言	生徒の活動・指導の留意点
<p>一 導入</p> <p>①今日は、できるだけ気のあった人どうしで隣り合うようにすわってください。二人でもいいし、三人になってもいいですよ。</p> <p>②今日は、小学校一年生の子どもが書いた作文をもとに、みなさんにも自分のことや友だちのことを書いてもらいます。小学校一年生に負けないように書いてください。書いたものは、あとで隣り合ってすわった人と交換しますから、そのつもりで。</p> <p>二 展開</p> <p>③（前半部分を見せる）この作文を書いた子は、やっちゃんといっています。ここには自分のことを書いてありますね。よく読んで、やっちゃんにならってみなさんも自分のことを書いてください。どうしても書けない人は、なぜ書けないのか、自分で自分にたずねてみてください。</p> <p>④（最後の一文をのぞいた後半部分を見せる）やっちゃんは、同じクラスの高かちゃんのことをこんなふうに書きました。それではみなさんも、今となり合ってすわった友だちのことについて書いてみてください。</p> <p>⑤ みなさんに聞きます。まず、自分のことが書きにくいなあと思った人、あるいは書けなかった人、正直に手を挙げてください。どうして書きにくかったですか。</p> <p>⑥ 次に、相手の人のことについて書きにくいなあと思った人、あるいは書けなかった人、正直に手を挙げてください。どうして書きにくかったですか。</p> <p>⑦ やっちゃんは、この作文の最後にこう書いています。（最後の一文を見せる）どうですか。どんなふうに感じますか。</p> <p>⑧ それでは、自分の書いたものを相手の人と交換してください。お互いに読み合ってください。どんな気持ちですか。感じたことを教えてください。</p>	<p>①一人で孤立してしまう生徒が出ないように、その場合は三人の組になるように配慮する。</p> <p>②この後することについて、あらかじめ予告しておく。</p> <p>③書き方の分からない生徒には個別に指導する。書けない生徒には無理強いしない。</p> <p>④③と同様、書けない生徒には無理強いしない。</p> <p>⑤自分の気持ちにきちんと向き合えるように、書けないという事実は受けとめ、素直に意見が出せるようにする。</p> <p>⑥⑤といっしょに発問してもよい。</p> <p>⑦意見が出なければ⑧にいってもよい。</p> <p>⑧読み合っているときの表情を見がさず、できれば一人ずつ聞いていきたい。</p>

※備考

実際にこの展開で授業をしたあるクラスでは、相手の生徒が書いたものを読んでとてもうれしそうな表情をした生徒が何人もいた。中には、「宝物にする」といって大事にしまい込んだ生徒もいた。書かれた内容はどれも「そのとおり」のことで、意外なことを指摘されることはなかった。どんなに仲のいい友だちでも、こうやってことばで自分を表現されることで、改めて確かな自分の姿を感じるようである。